少年と犬

～ Endless World ～ Ⅳ

原作◆カント KANTO　イラスト◆水上 二十歳 MIZUKAMI HATATI

少年と犬

～ Endless World ～

Ⅳ

合同サークル
DrawingWriting

原作：カント　イラスト：水上二十歳

少年と犬

～ Endless World ～ Ⅳ

原作 ◆ カント KANTO　イラスト◆ 水上 二十歳 MIZUKAMI HATATI

contents

第一話　大地が如く連綿と続く
　　生命の燦爛たる光輝と

第二話　星の数にも似た無数の屍の果てに

第三話　すべてが虹の海へと
　　融け沈んだとしても

第四話　それでも、少年は犬を愛する

第一話「大地が如く連綿と続く生命の燦爛たる光輝と」

――二撃だな、と、ロギスは胸中で呟いた。

理屈は至極単純だ。彼は両手にそれぞれ一振りの剣を握っている。向かってくる相手の攻撃を片方の剣でいなし、更にもう片方の剣で首を掻っ切る。故に二撃。この戦いは、それで終わる。

無論、通常であれば、こうも単純化した局面には至らない。だが、この場では別だ。

ロギスは額から流れる赤黒い血、口の端を撫でるように伝っていくそれを、舌で軽く舐めた。伝う血の源には、自らで突き刺した、未知の――矢尻のように鋭い――鉱物。いまそこからは、流れる血を補うかのような、莫大なエネルギーが溢れ出している。それはシルクのように滑らかな肌触りで、破滅的なまでに煌びやかな虹色の光となってロギスの体躯を覆い、蔦のように触手のように、この巨大な地下空洞で蠢いている。

試しに、虹の一切れを、前方の岩の一つ――この地下空洞に無数に砕け落ちた、人間大の岩塊へと向ける。

容易く、まるでもう一つ腕が生えたかのように、虹の切れ端は目指す方向へ向かい――触れた途端、岩塊は融解するように消滅した。

消滅。

頭の中へ、語りかけてくる声がある。この力は何か。どう使うものか。どのような性質を持つものか。それは彼が手にした力の揮い方を把握するに十分で、だからこそ、彼は冷静に試算出来たのだ。

結論は『二撃』だと。

……轟々と唸り声を上げる地下水流を横目に、ロギスは前方十数メートル先を見つめる。

大きく平らな岩盤の上で剣を構えるは、一人の青年。その眼光は鋭く、頭を低くし、腕を引いて、薄い紫色の剣の切っ先を、真っ直ぐにこちらに向けている。血と泥に塗れた体躯ながらも、剣は石のように崩れず、震えない。美しい程に洗練された刺突の構えを取る青年の頭上からは、微かな光が光芒のように差し込んでいて、先程巻き上げられた水飛沫がキラキラと輝いていた。その一方、青年の右腕には、嵐を彷彿とさせる稲光が駆け巡り、空気を裂く異音と共に、巨大な紫色の炎を滾らせている。

異形と呼ぶ他無い相貌。

だが、それは今、虹の力を放つ、自身もまた同じ。

相手の力の正体を、ロギスは知らない。人の理を外れた巨大な衝撃を生み出せることは、つい

先程、相手が地下水流に巨大な爪痕を遺した姿から知ってはいるが、それだけだ。だが、その不利を覆す程の力を、虹は有している。問答無用で触れたものを消滅させる――頭の中の声によれば『神の肉体をすら消滅せしめる』という、常軌を逸した光。こと闘いに於いて、これ程に凶悪な力は他にあるまい。

前方の青年は、間違いなくその危険性を理解している。だからこそ、刺突の構えなのだろう。実に単純で、しかし明瞭な解だ。触れるだけで危険な光。それを掻い潜り、この勝負に決着をつけるならば、ひらひらと舞い踊る無数の虹の触手たちが、時の狭間に作る微かな隙を、一突きにするのが良作だ。自分が逆の立場でも、それを狙うに違いない。

狙いがハッキリしているならば、対策は容易だ。敢えて虹に隙を造り、誘い込んでしまえばよい。こちらに致死性の凶悪な力がある以上、相手はそれに乗る他、道は無い。こうして、いなすための一撃、急所を抉る一撃により、この勝負は終わる。

『てめえ、何がしたくて強くなりたかったんだ？』

――今更だ、と、ロギスは胸中で呟く。

そう、何もかも今更だ。例えあの日――父が死んだ日、父が世界を呪っていたとしても、あるいは、父が自身に笑いかけてくれていたとしても。

そこから過ごしてきた全ての日々は、もう変わらない。

かつて、エモに告げられたことがある。「あんたの剣は歪だな」と。成る程、と思ったものだ。彼の言葉は、きっと正しい。

自分は剣術ではなく、殺人術を学んだ。非人道な手段でも、効果的なら躊躇わず用いた。幼き頃は逃げるために、マージでは無辜の民を守るため――いや、それらを傷つけるものを『討ち滅ぼす』ために。自分の手は無数の返り血に塗れていて、自分の足元には無数の屍が腐臭を放っている。それを否定することは、殺してきた全ての者への侮辱に他ならない。ならばこそ、自分はこの道を進もう。例え、自身が剣の師と仰ぎ、叶わなかった人物と、殺し合うとしても。

『俺を忘れるな』

「忘れませんよ」

忘れない。忘れることなど出来ない。……だが。

もし、願うことが許されるならば。

『例え半死半生だろうと、大博打の瞬間だろうと、忘れねえ』